黒之戦記

双子亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒之戦記

【Ｎコード】
Ｎ３０５７Ｓ

【作者名】
双子亭

【あらすじ】
在籍高校トップの学力をもつ『ユウキ・サイトウ』は、学校の『鳴らずの鐘』の音とともに異世界に迷い込んでしまった。迷い込んだ先の世界『エルムバルド大陸』は平和な日本とはかけ離れた戦火で覆われた世界。ユウキは黒髪だからという理由で様々な困難が降り掛かってくるが、己の持つ知識をフル活用して生き残ろうとする彼の前に立ちはだかるのは……花も恥じらう姫騎士たち！？　エルフ有り、獣人有り、魔法有りの異世界で繰り広げられる壮大な物語の幕が今、開かれる。

黒之戦記の始まり（前書き）

初めまして、『双子亭』です。投稿は月に一度にしようと思っています。初投稿ですがよろしくお願いします。

黒之戦記の始まり

エルムバルト大陸――――

かつて、主神にして創造神である『アース』によって創り出されたこの大陸を４人の神々が支配していた。４人の神々はそれぞれ『四大属性』の内の１つを司り、次のように呼ばれた。

火を司る、火霊神『ルークムント』

水を司る、水霊神『フェイナール』

土を司る、土霊神『ラウド・バゴ』

風を司る、風霊神『イグニシア』

また、４人の神々の加護を受けた者のことを、『火の民』、『水の民』、『土の民』、『風の民』と呼び、その特徴としては頭髪の色が『四大属性』のそれぞれを象徴する、赤、青、茶、緑であり、神々とともに大陸の秩序と安寧を守り続けてきた。大陸の実りは非常に豊かであり、気候も安定しており、争いは起こらず平和で、大陸の住人の暮らしぶりはとてもよかった。

しかし、ある来訪者の一言で大陸の状況は一変してしまった。

影の女神『デルフィニア』

来訪者は主神アースの姉であり、世界の最果てに住まうとされている、女神デルフィニアであった。４人の神々は突然の来訪に驚いたものの、丁重にもてなそうとしたが、女神デルフィニアはそれを拒み、主神アースからの言葉を残すと姿を消した。

その言葉とは……

４人の中で、最も強い者を主神の後継者とする――――

その言葉を聞いた後、４人の神々は今までの平和がまるで嘘であったかのように、争い始めた。争いは神々の間だけにはとどまらず神々の加護を受ける者たちにまで及び、大陸全土に争いの影が広まっていった。天空は戦火の黒煙で覆われ、緑豊かな大地は荒れ地となり、蒼海は流血で赤く染まった。また、大陸の各地に屍の山が築かれ、そのほとんどが神の加護を受けていなかった者たちであり、生き残ったのは加護を受けた４つの民であった。

神々の戦いは何百年も続いた。元々、『四大属性』というものは、それぞれが有利不利の関係である。例えば、火は水に対して不利であるが、土に有利である。そのような関係なのだから、戦いに終わりがないのは当然であり、４人の神々は次第に弱っていき、大陸の守る堅固な結界は消失していった。

結界の消失後、女神デルフィニアは自身が加護する『影の民』とともに、魔獣の群れを引き連れて大陸を襲った。４人の神々は女神デルフィニアの侵攻で初めて自分たちが騙されていたことに気づき、４つの民とともに大陸を守ろうとしたが、弱りきった神々と加護受けた者たちは為す術無く倒されてしまい、女神デルフィニアによる大陸占領も最早目の前までせまったときであった。

女神デルフィニアが１つの火山にさしかかった時、一筋の稲妻が女神に直撃し、そのまま灼熱の溶岩の中へと消えていった。主神アースの攻撃であった。主神アースはそのまま自身の力を使いきり、大陸をのさばる魔獣の群れを殲滅し、『影の民』を大陸の外へと追い出した。

力を使い果たした主神アースは力の回復のため、大陸の復興を妻である光の女神『レミリア』に託し、４人の神々とともに精神の世界へと旅立っていった。

光の女神レミリアは大陸に緑を与え、自然を取り戻すことはできた。しかし、完全に元の楽園のような大陸にすることはできなかった。この大陸は元々、４人の神々によって支配されており、大陸の住人の間で争いが起きないよう、見張り続けてきた。だが、いまは女神レミリアのみが大陸を支配しているので、絶えずどこかで争いは起きていた。行き過ぎた争いは女神レミリアによって防がれてきたが、やがて大陸の住人は国を作るようになり、大陸はいくつもの国に分かれていった。

分かれては1つになり、生まれては消えてゆく。その繰り返しを何千年も行い、大陸の情勢は今に至ったのであった。

――――王立学園古代歴史学准教授、レイン・クリミナス

アークランド王国リーネンブルク侯爵領――――

イスに腰掛けた1人の女性が色とりどりの花が咲き乱れる庭園の中、今まで読んでいた羊皮紙を傍らの小テーブルに置き、右手で軽く目頭を揉んだ。年齢は70代と思われるこの女性の顔はとても白く、この場合、色白の白ではなく病的な白を指し、無数の皺が刻まれていた。頭髪は『水の民』の象徴である青色であるが、色は薄く、春の日差しを受けて所々白く光る髪が混じっている。

「イリーナ様、そろそろお屋敷の中へお戻りください」
「えぇ、そうね、少し疲れたわ。リン、私の部屋にレーム茶を持って来てくれる」

「かしこまりました」

そう言うと、赤猫族の獣人召使いのリンは己の主の手を取り、主の杖代わりとなった。

イリーナ・ウィル・リーネンブルク・ヴェルハイム

それがリンの主の名前であり、同時にリーネンブルク侯爵家の当主の名前でもあった。イリーナの夫は彼女が息子を生んだ後に不治の病で死別しており、息子と息子の妻も一人娘を残し、戦死していった。残された一人娘、イリーナにとっての孫娘は王立学園にて水霊術を学んでいるため、現在この屋敷で暮らしているのはイリーナとリン、そしてリンの妹で召使いのネルであった。

リンはイリーナの手を取りながら尋ねた。

「先ほどは何を読まれていたのですか？」

「学園で教鞭をとっている教え子の手紙よ。歴史の研究をしている人で、世界創造についての見解を手紙で送ってくれたの」

「それで、どうでしたか」

「そうね、見方に関しては私も同じなのだけど、教国のことを考えるとこれを世に出すには時期が悪いわね」

教国とは『ウェルステリア教国』のことを指し、四大霊神と光の女神レミリアを信仰する『ウェルセーヌ教』の総本山であり、エルムバルト大陸において最も信者の多い国である。教国は光の女神レ

ミリアに加護された『光の民』を中心に政を進めており、四大霊神の信仰もあるが、光の女神レミリアの影響力の方が断然高い。レインの手紙は取り方によっては光の女神レミリアは人を支配する力がないともとらえることができる。現在の王国の情勢のことを考えれば、教国との間で問題を起こしている余裕はないのである。

エルムバルト大陸は、北部大陸、中部大陸、南部大陸の３つに分けることができ、アークランド王国やウェルステリア教国などの人間種の国は中部にあり、北部にはエルフ種の国が、南部には獣人種の集落が存在していた。アークランド王国は中部大陸の南東部に位置し、東は『セイレーンの海』に接し、南は森林が広がっているが、その先には荒野があり、さらにその先には『ラウド・バゴ砂漠』という中部大陸と南部大陸を隔てる巨大な砂漠がある。西はウェルステリア教国に、北西は１０００年前にエルムバルト大陸を統一した『メルティアナ帝国』、北は１０年前にメルティアナ帝国から独立した新興国家『サルナーダ王国』と接している。

アークランド王国はサルナーダ王国と同盟を結び、メルティアナ帝国と戦争をしてきたが、３年前にウェルステリア教国が仲介役となって、両者の間で期限付きの不戦協定が結ばれることとなった。条約締結の要因となったのは３か国の国力低下であった。再び大陸統一を目指しているメルティアナ帝国は北のエルフの国とも長い間戦いを繰り広げており、３か国を相手にして戦うには、人も金も不足しつつあったのだ。大陸最強の国の誇りとして休戦を言い出せなったメルティアナ帝国は、ウェルステリア教国に密使を送り仲介役を頼んだ。ウェルステリア教国は自身の権力を世に示し、また帝国に借りを作ることができると考え、同盟王国軍側に使者を送り停戦を求めた。アークランド王国及びサルナーダ王国も長期の戦いに国は疲弊しきっており、ウェルステリア教国の求めに応じ停戦、翌年

ウェルステリア教国聖都『ルーンバード』にて3か国の間で休戦協定が結ばれた。『ルーンバード休戦協定』である。これを機に3か国は富国強兵を目指して国政に力を入れようとしていた。

しかし、女神レミリアはどの国にも微笑まなかった。

休戦協定が結ばれた年、大陸は前代未聞の日照りの害にあっていた。川や湖は枯れ、麦や野菜を育てることができず、国全体で食料不足、水不足が続いた。また、先の戦いの逃亡兵や敗残兵が賊となって辺境の村々を荒し回り、男たちを殺し、若い女を攫い、食糧や金目の物を奪い尽くすと村を焼き払っていった。災いはそれだけに収まらなかった。階層において底辺にあたる『平民』たちが蜂起したのだ。彼らは『平民解放軍』と名乗り、各地の領主館や小さな砦を襲った。特に兵力不足の著しいアークランド王国では平民解放軍に敗れる領主まで現れ、彼らの勢いは勝利を重ねるごとに増していった。今では王国軍も各地で平民解放軍に対し勝利をおさめ、彼らの勢力は弱まりつつあるが、その存在が消えることはなく、王国の脅威となっていた。

王国は現在そういう状況下におかれ、これ以上問題を増やすこと

はできないのである。

「レインだけではなく、他の教え子たちもそう。みんなこの国をよい方向へ導く知識や技術を考えてくれているのに、私は何の力にもなってあげることができないなんてね……」

侯爵の飾りをつけているのにね、と悲しそうに呟く自分の主の姿にリンは心苦しくなった。しかし、イリーナはすぐに笑顔になってリンに尋ねた。

「こういう時こそあの子の笑顔を見て元気になりたいわね。ネルは今どこにいるのかしら？」

「ネルには今、裏庭の掃除をさせていますが、もうすぐ終わるはずだと……」

そう言い終わらない内に、前方から赤いツインテールの髪を揺らしながら獣人召使いのネルが駆けて来た。

「イリーナ様！　イリーナ様！　大変です！」

「あらあら、いったいどうしたの？」

「ひ、ヒトが裏庭で倒れていて、それで、血が出てるんです」

「それは大変ね、すぐに案内してちょうだい」

「イリーナ様、危険です。ここは私とネルだけでいきますのでイリーナ様はお屋敷の中へお戻りください」

「いいえ、リン。私は領主であると同時に医者でもあるのよ、怪我を負っているヒトを見過ごすわけにはいかないわ」

「しかし……」

リンはここ最近、このお屋敷がある『リトルベルク』の近くで賊らしき者を見たという噂を聞いており、安全のために主に屋敷へ戻ってもらおうとしたが、ネルの言葉に遮られてしまった。

「それで、もっと大変なことが……」

「あら、まだ何かあるの？」

イリーナが尋ねると、ネルは息を整えて答えた。その言葉にリンはもちろん、イリーナも驚きのあまり、しばらく動くことが出来なかった。

髪が黒色なんです、と———

――――『黒之戦記』の舞台幕は、アークランド王国の辺境領で開かれるのであった。

『出会い』第1話

リーネンブルク侯爵領イリーナの屋敷ーーーー

「……ここは？」

気がついたら、俺は知らない部屋に寝かされていた。部屋は中世欧州風の造りであり、ベッドは高級ホテルに行かなければお目にかかることはないだろうと思われる、大きくて寝心地の良いベッドだった。

「……どうやってここに来たっけ？」

分からない。どうしても俺はここまで来た記憶を思い出すことができなかった。

「痛っ」

周りを確認しようと体を動かそうとしたら、体に激痛が走った。シーツを取ってみると胸の辺りに包帯が巻かれており、その上から着ている服は古めかしい服装だった。

「こんな怪我、いつ作ったんだ？」

大怪我をしているようだが、そのことさえ思い出すことができなかった俺は、最初から順序立てて思い出すことにした。

俺の名前は『サイトウ　ユウキ』、高校３年生で身長は１７０ｃｍくらい。太っている訳でもなく、痩せすぎている訳でもない。また性格は明るすぎず、暗すぎず、要は中肉中背の人並みの性格をした学生であるということ。他の人よりも秀でていることは、物覚えが少しいいことくらいだ。

さて、俺がこの見知らぬ地に来た経緯だが、一番はじめに思い出せるのは部活が終わって帰宅しようとしていた時のことだ。俺は弓道部に所属していて、最後の大会も近くて１人で居残り練習をしていた。いつもは何人かの後輩と練習をするのだが、その日後輩たちは都合が悪く、俺１人で練習していた。帰宅時間となり、部室を締め、他の生徒たちはもうとっくに帰ったのだろうか、１人で門に向かって歩こうとしていたときだった。

きれいな鐘の音が聞こえてきた。

振り返った俺は目を疑った。学校の七不思議にもなっている、『鳴らずの鐘』が鳴っていたのだ。鐘の音はとても澄んでいて、音楽に興味を持たない俺でさえ、聞き惚れてしまっていた。鐘はいつまでも鳴り続けていたが、不意に、突風が俺を襲った。風は周りの砂

や埃をまき散らしながら、吹き抜けていった。あまりの勢いと砂や埃のせいで俺は一瞬だけ目を瞑り、再び目を開けた時、

見知らぬ広場に、俺は立っていた。

突然の状況変化についていけなかった俺はしばらく呆然としていた。広場はそう広くはなく、周りを大樹が囲んでいて、まるで樹海の中にいるような感じだった。今まで持っていた荷物はなく、どうやら着の身着のままでここに来てしまったようだった。携帯も鞄の中に入ったままで連絡もとれず、途方にくれているときだった。

地獄の底から響いてくるような、獣のうなり声を聞いた。

うなり声は木々の間から聞こえ、草木をかき分ける音や地鳴りのような足音とともに近づきつつあった。そして俺の前に表した姿は俺の想像を超えたものだった。

体長はマイクロバスと同じくらいだろうか。体毛は燃えるような赤色で、頭には金色の双角がついている狼に類似した化け物が、鋭い牙を見せながら少しずつ近づいてきた。

逃げろ――――

本能がそう叫んだように思えた俺は、化け物に背を向けて逃げ出そうとしたが次の瞬間、背中に鋭い痛みを覚えて、そのまま地面に

倒れてしまった。俺は近づきつつある化け物を視界の端にとらえながら、激しい背中の痛みによって意識を手放したのだった。

そして、気がついたらベッドの上に寝かされていたのだ。痛みが少し和らいできたので、上体を起こして部屋を見渡した。部屋は過度な装飾はされておらず、特に目を引くようなものはなかった。思うように体を動かすことができなかったので、再びベッドの中に戻ろうとした時だった。部屋の唯一の出入り口である扉からノックのする音が聞こえ、扉が開かれると水色の髪をした老女と猫耳を付けた赤髪の少女が現れた。あまり見かけない色の髪に俺は戸惑ったが、老女は笑みを浮かべてこう言った。

「気がついたのかしら」
「……あの」
「あら、何かしら？」
「……その……ここはいったい…それにあなたは……」
「私の名前はイリーナ・ウィル・リーネンブルク・ヴェルハイム、アークランド王国に忠誠を誓う侯爵家の当主で、ここはアークランド王国リーネンブルク侯爵領にある私の家よ」
「……」
「全くわからないといった感じね。無理もないわ、あなたにとっては『異界の地』ですもの」
「！！　それはいったいどういう……」
「待って、私は名乗ったのにまだあなたの名前を私は知らないわ」

「すみません、えっと、お……私の名前は『ユウキ・サイトウ』といいます」

そして俺はここまでの出来事をイリーナさんに話した。やさしい笑みを浮かべるイリーナさんに対して俺は徐々に警戒心を解いていった。話し終わると、イリーナさんはしばらく何か考えるかのように目を閉じていたが、目を開けて後ろに控えていた、メイド服を着た赤髪少女に向かって、

「リン、私は彼の言っていることが嘘のように聞こえなかったのだけど、あなたはどう思う？」

「……私にもそう聞こえましたが、しかし……」

「髪が黒いから信用できない、と」

「……はい」

そういうと、猫耳メイドのリンは俺を睨みつけた。イリーナさんの影で分からなかったが、どうやら彼女は剣を腰にさしているようで絶えずその手は剣の柄を握っていた。しかし、髪が黒いから警戒されるとはどういうことだろうか？

「それを説明するには、この世界の神々のことから話さないといけないわね」

「……神、ですか？」

イリーナさんはこの世界の簡単な歴史と、神々の加護を受けるこ

とで使うことのできる『霊術』と呼ばれる力について説明した。霊術には火、水、土、風の４つの属性があり、これらを『四大属性』といった。またこれとは別に、光と闇の属性というものがあり、この２つの力を『二大極性』と呼んだ。光と闇の属性をもつ者はこの世界では非常に少なく、光の属性はウェルステリア教国と呼ばれる国を治める一族のみが確認されており、闇の属性は古代四大霊神統治時代に女神デルフィニアとともに襲来した『影の民』以外では認められていないそうだ。最も、『影の民』はその昔、主神によって異界の地に追放されたそれ、この大陸には存在しないことになっている。そして、これらを見分けるのは髪の色らしい。４つの属性と２つの極性の象徴する色が髪に現れるらしく、俺の黒髪は闇を象徴する色だ。

「私がその『影の民』かもしれないから、ですか」
「そうよ、だけどあなたは『影の民』ではないでしょ」
「はい、そうですが……」

だがしかし、俺自身をその『影の民』でないという証明する手段がない。いくら俺が異世界から来たと言っても、少なくとも後ろに控えるメイドは信じてくれないだろう。何か髪の色以外で証明することはできないだろか……

「……そうだわ！　あれを使ってみましょう」

そう言うと、イリーナさんは部屋を出て行った。部屋に残ったのは俺に睨みをきかす、猫耳メイドのみ。話かけようかと思ったが、

今にも腰の剣を抜かんとする勢いに俺はただ目を合わせないように、外の景色を眺めていることしかできなかった。しばらく経つと、再び扉が開かれ、イリーナさんは小箱を抱えて部屋に入って来た。小箱開けたイリーナさんの取り出した物は、水晶のようなものだった。

「これはね、霊導工学で教鞭を取っている教え子が発明した霊導具で、そのヒトの持つ能力のすべてを測定することができるの」
「すべて、ですか」
「そう、すべて。これを使えばあなたの霊力の属性も一目瞭然よ」

イリーナさんは俺に水晶に手を当てさせた。無色だった水晶は白く濁り始め、渦を巻くようにしていたが、次第に色は変化していった。

「……赤、に見えるんですけど……」
「あら、私には青に見えるわよ」
「っ！！　イリーナ様、黒です！　やはりこの男、ここで殺さねば……」
「ま、待って！　今度は緑に見える！」
「あら、本当。さっきは青に見えたのに、今は茶色に見えるわ」

結論から言うと、分からなかった。水晶は様々な色を映し出し、俺がどの属性なのかを示し出さなかった。まあ、元々俺自身何の加護も受けていない異世界人なのだから当然といえば当然だ。しかしこれで俺が安全であるという証明になったのだろうか？

「『影の民』でないことは私たちにだけ証明できたわね」
「？　それはどういうことですか？」
「この能力測定水晶は世界でこれ１つしかないの。しかも発明されたのはつい最近だから世間はこれの存在を知らないでしょうね」
「……それで私はどうすれば……」
「まあ、安心しなさい。しばらくは私の治める領内にいるといいわ。老いてはいても侯爵家の当主なのだから、あなたの身の安全を保証することくらいできるわよ」

あまり納得のできない説得をされたが、現状ではイリーナさんに頼るしか道はないように思えた俺は、彼女の提案に従うことにした。だがしかし、これをよく思わない者もいるわけで……

「……」
「あらあらリン、そんなに見つめて……一目惚れ？」
「なっ／／／　ち、ちがいます！　私はただ」
「フフ、いいのよ。私もあなたの年の頃には」
「だから……くっ、やはり貴様を殺すべきだ！」
「ちょ、言い訳できないからって、俺に剣を」
「問答無用！！」
「なっ、待て、いや、待ってください、おねガッ」

言い終わらない内に剣の平で殴られた俺は、理不尽な痛みとイリーナさんの「あらあら」という声を聞きながら、俺は再び意識を手放した。

イリーナの書斎――――

異界の人間と話をしてから時間は経ち、あたりはすっかり暗くなり、イリーナは書斎にある『光霊石』に霊力を通して光らせ、机の上に置いた。机の上にはたくさんの手紙が山を作っていたが、今はそれらは両脇に片づけられており真ん中には先ほどの水晶が置かれていた。

「……」

イリーナは水晶の前の椅子に腰掛けながら、人差し指を顎にあてながら考え事をしていた。これはイリーナが若い頃からの癖のようなもので、集中して考え事をしたい時はいつもこのようにしていた。イリーナがこれほどまでに悩ませるのは、異界の人間の属性を確認することができなかったことではない。

まず1つめの悩みの種は彼をここまで連れて来たのは誰なのか、ということだ。重傷を負った少年が誰の目にもとまらずにここまでくるのは不可能であり、彼の倒れていた場所には微かだが風霊術の痕跡があった。ヒト1人を運ぶことができるということは、相当な力を持った風霊術士でなければ為すことができないほどのことであり、イリーナの知る限り王国にはそのようなヒトはいないのだ。

2つ目の悩みの種は目の前にある水晶だった。この水晶は測定し

たヒトのあらゆる能力を知ることができ、それは必ずしも霊力だけとは限らなかった。イリーナは目を開けて再び水晶を見た。そこには変わらず文字が浮かんでいた。その水晶の表す文字こそ、イリーナを悩ませる種だった。そこには……

錬成術士――

と書かれていた。

（錬金術士ならば過去に存在したけど、錬成術士とはいったい……）

イリーナは再び目を閉じて考え始めた。しかしどれだけ考えても、イリーナにとって最良となる結論には至らなかった。

『出会い』第2話

リーネンブルク侯爵領リトルベルク――――

あれから1年が過ぎたが、俺は依然としてイリーナさんの家に居候をしている。そして元の世界に戻る方法を調べるのに必要な言語や知識はイリーナさんに教わった。言語の他にもこの世界の歴史や文化、技術などこの世界にしかないものから、政治、経済など元の世界に帰ってからでも使えるような学問も学んだ。最初は元の世界に帰る方法とは関係ないのではと思ったが、イリーナさんの講義を受けるのは非常に楽しく、断ることができなかった。何でもイリーナさん若い頃、『王立学園』と呼ばれる学校のような所で教職についていたようで、教え方が上手く理解しやすいのだと思った。

また、勉強だけでなく、友達も増えた。イリーナさんが拠点として構えている『リトルベルク』には1万人のヒトが住んでおり、主に人間種が多いがその次に多いのは獣人種の『赤猫族』だ。彼らは、元々南の方に住んでいたが、他部族の侵攻を受けてこの地まで逃れて来たのだ。当時元から住んでいた人間種からは獣人種の定住に反対の意を示し、一部では強制排除に乗り出そうとする者もいたが、イリーナさんが両者の仲介役となり、武力衝突を防ぎ、獣人種の定住を認めた。今ではこのリトルベルクでは人間種と獣人種の間で争いはなく、皆協力して日々の生活を営んでいる。また少数ではあるがハーフエルフ種も住んでいる。

俺は最初、黒髪を持っているということでリトルベルクでも浮いた存在であり、町を歩いていても避けられるなどして、なかなか話しかけることさえできなかった。しかし、イリーナさんやもう1人のメイドのネルちゃんのおかげで、リトルベルクに住む人々とはあいさつを交わしたり他愛無い話をするようになった。

だがこの1年間、いいことばかりあったわけではなく、その1つとしてイリーナさんの体調だった。俺を助けてくれてからしばらくの間は体調はよかったのだが、しばらくすると顔色がどんどん悪くなっていき、いまでは1日のほとんどをベッドで過ごしている状態だ。俺は2人のメイドと話し合って、イリーナさんの仕事の内何割かを自分の方にまわし、楽をしてもらおうとした。最初こそイリーナさんは拒否し続けたが、体調が悪くなってくると俺にいくつかの仕事をまかせるようになった。元の世界に戻る方法を探す時間は減ってしまったが、今までの衣食住の面倒を見てもらった恩を返すため、俺は任された仕事をこなしていった。

――――これは仕事にも慣れ、交友関係も広がったそんなある日のことだった。

俺はイリーナさんの屋敷の南側にある『商人街』に来ていた。俺は紺色の服を着ていたが、街に出るときは必ずその上から茶色のローブを羽織って、黒髪が目立たないよう目深くフードを被るように

していた。商人街の中にある一軒の店の前で足を止めた俺は、がたいのいい茶髪の店主に話しかけた。

「やあ、店主」
「お、ユウキじゃねぇか。今日はどうした？」
「ちょっと見回りを兼ねた散歩、みたいなものかな」
「ほう、そうかい。そうだ、こいつらを見てくれ」

そう言って、店主は軒に並べられている野菜を俺に見せてくれた。どれも瑞々しく、艶やかな実ばかりでだった。

「今年は豊作だったということは聞いてるよ」
「いや、こいつはただの豊作じゃねぇ。俺は長いこと商売やってるが、こんなに上質な野菜が手に入るなんて今まで一度もなかったぜ」
「それは農夫の人たちが精を出してがんばってくれたからじゃないのか」
「確かにそうかもしれねぇが、奴らのやる気を出させたのは、ユウキ、お前じゃないのか」
「……」
「農夫だけじゃねぇ、俺たち商人だってそうだ。お前さんが政を仕切るようになってから、このリトルベルクは活気に満ちあふれてきた。イリーナ様の政が悪いわけじゃねぇが、あの方は戦争難民や他民族の受け入れとか、このリトルベルクの基礎をお造りになられた。俺たちはな、ユウキ。イリーナ様に感謝するのと同じくらいお前にも感謝している。ありがとな」

俺は店主に軽く頭を下げると、店を後にした。通りには様々な種類の店が開いており、それらの店は色とりどりの旗や看板を掲げている。また、路上では客を呼び込む娘のかわいらしい声や店主と値段交渉する買い物客の声、通りを走り抜ける子供たちの笑い声など喧噪に満ちあふれていた。

リトルベルクは確かに変わった。俺が初めて来た時は人の少ない静かな城下町だったのが、今ではたくさんの人が行き交うにぎやかな町となっていた。リトルベルクの変革はもちろん俺に原因があるだろう。最初の頃は書類整理などの簡単な仕事をしていたが、最近ではリーネンブルクの村や町の代表との会合にイリーナさんの代役として出席するなど、ほぼリーネンブルクの政は俺が仕切っていた。イリーナさんから教わった知識や元いた世界の知識を使い、今まで何とかやってきたが、正直不安だった。俺の政の指針は本当にあっているのか、俺の行いで誰かが傷ついていないかなど、不安で眠れない日もあった。しかし、先ほどのように感謝を述べられたり、活気のある町をたくさんの人たちが行き交う様を見ていると、そういう不安は薄れていった。

（だけど、これで満足してたらだめだ）

そう、ひとつの問題が解決されるとまた新たな問題が生まれてくることをこの世界で学んだ俺は、いつもこうして街を歩いて見て回っていた。机上では気づかないことも、実際に見て回ると気づくこともあるからだ。

商人街の中心部まで歩いて来た俺は、路上に人だかりが出来ているのを見つけた。あれは確か『傭兵ギルド』のある建物の前だったはずだ。人だかりをかき分けてその中を見ると一人の少女と三人の武装した男たち、あれは多分傭兵だろうと思われる者たちが剣を抜いて立っていた。

「返してください！　その剣は私の大切な剣なんです！」
「だからよ～　お前なんかが持ってるよりも俺様が持っている方がふさわしいんだって言ってるだろうが」
「へへっ」
「女は家に帰って編み物でもしてな」

そういうと、男たちの中で一番体格の大きい男は自分の腰に下げている剣を撫でた。剣はかなり凝った装飾がしてあり、とてもその男には似合わなかった。少女の方は身なりはそこらにいる村娘とそう変わらないが、身の丈が自分の2倍もある男たちにひるまずに食って掛かっている様子を見るとよほど大事な剣なのだろう。

（やれやれ、人が増えるとこういう事件も増えるから困る）

俺は4人の所まで行くと少女を庇うようにして立った。

「……なんだ、てめえは？」
「すみませんが、あなたの腰に下げている剣を彼女に返していただ

けないでしょうか」
「いきなり出てきたと思えば何を言いやがる！」
「そうだぞ！　痛い目に合いたくなきゃ引っ込んでろ！」

……あれ、なんかおかしいぞ。傭兵の争い事に俺が関わろうとすると、彼らは大抵俺が来る前に逃げるか、逃げなかったとしても一言二言言葉を交わすだけで場は収まるのだが、今回は少し違うようだ。傭兵たちの顔はあまり見かけない顔で、ここを『拠点』としない外から来た傭兵なのだろう。『拠点』とは傭兵たち活動中心地のようなもので、このリトルベルクも『傭兵ギルド』をもつことから傭兵たちの拠点となっている。リトルベルクの傭兵はその大部分は赤猫族の戦士であり、その他には人間や他の獣人種の傭兵がいる。リトルベルクの傭兵は俺がどういう立場の人間かは分かっているので絶対に揉め事を起こそうとはしないが、彼らは俺のことをただの通りすがりの男にしか見えなかったのだろう。それに彼らは酒を飲んだ後のようで、とても酒臭かった。そんな奴らにどれだけ言葉を重ねたって意味はない。

（さて、どうしたものか……）

最悪の時のため、あたりに警邏の兵士がいないかと見回した時だった。人垣の中から一人の男が出て来た。無精髭を生やし左目に眼帯を付け濃い緑の髪を短く刈った男、『アレイン・ゲイルバーグ』が現れた。

「お前たち、その者に対して剣を向けるでない」

「今度はジジイかよ……　で、こいつがなんだっていうんだ」
「この男はこのリトルベルクになくてはならない存在だ。傷つけることは……」

アレインは腰に下げていた剣を抜いた。

「このアレイン・ゲイルバーグが許さぬぞ！」
「……アレイン？　もしかして『ほら吹き』アレインか！」

そういうと傭兵たちは大笑いし始めた。当のアレインは微塵も動かず剣の切っ先を傭兵たちに向けていたが、彼の背からは怒気を感じた。

「暴れ竜を殺しただの、数千の『呪われし民』と戦っただの数多の嘘を国王に対して付いた男に、こんな所で出会えるとは思わなかったぜ」
「……黙れ」
「確か王に対する偽証罪で領地を取り上げられ、由緒あるゲイルバーグ家も潰されたんだったよな？」
「…黙れ」
「挙げ句の果てに女房と子供に見放され、一文無しで路頭に追い出されたんだったよな？」
「黙れ！！」

アレインは剣を上段に構えると正面の男に襲いかかった。男も自

分の剣で応戦し、残りの二人も男の援護に回った。しかし、アレインは片足を引きずっている上に隻眼だ。数合打ち合った後、アレインの剣は飛ばされ、彼自身は地面に倒れてしまった。

「アレイン！」

俺はアレインのもとへ駆け寄った。けがはしていなかったが、もうこれ以上は戦うことはできないだろう。しかし、彼の隻眼に諦めといったものは見えず、深い憎しみが色濃く映っていた。

「へっ、気が済んだだろ。この剣は俺がもらっていくからな」
「あ……待って」
「おい、ジジイには手加減してやったが、女、その柔肌に傷つけられたくなきゃおとなしくあきらめるんだな」

そういうと、傭兵たちはその場を離れようとした。少女は先ほどの戦いを目の当たりにしたせいか、今度は言い返そうとはせず、ただ黙って服の裾をつかんで俯いていた。俺自身もひるんでいて、彼らを止めることはできなかった。

そんな時だった。彼が現れたのは……

燃えるような赤色の長髪を後ろで括った美少年は傭兵たちの前に立ちはだかった。傭兵たちはどこか驚いた様子で少年のことを見ていた。

――――俺は美少年のことはまったく知らないし、何の根拠もなかったが、不思議なことに彼ならばこの状況をうまく解決できると、そう感じていた。

『出会い』第3話（前書き）

作者の諸事情により、６月に投稿することができず、申し訳ありませんでした。

『出会い』第3話

リトルベルク南門ーーーー

時は少し遡り、場所は商人街からリトルベルクを護る南門に移る。リトルベルクは辺境の田舎城下町ではあるが、その護りは堅固であった。町を囲む城壁は厚く、容易に越えられぬよう高く造られ、その周りを水で満たされた堀が囲んだ。東西南北には門が設けられており、扉はエルフの国に生息する霊力を吸って育った『霊樹』の材木を使用しており、物理的な攻撃はもちろん、霊術の攻撃にも耐えることが出来た。これだけの護りは、主に南方からの獣人族の侵攻や、最近では力を増した盗賊に対して備えるものであった。

そして城門には武装した下級騎士や従者たちが詰め、城内に入る隊商や旅人の検問を行っていた。度重なる盗賊の被害や『平民解放軍』の存在から、検問は普段よりもより厳重に行われ、城門前には入城するための長い列ができていた。

「……よし、通っていいぞ」
「はい、ありがとうございます」

入城許可が出された隊商の一団は城門を通り、商人街へと進んだ。3台の馬車と数騎の騎兵で構成された隊商の馬車の造りはしっかりとしており、馬の質もよく、また隊商を率いている小柄な男の装飾から見ても財産が豊かな商人であることが分かるだろう。隊商は商

人街に入ると大きな構えをした商店の前で止まり、馬車の中から様々な大きさの木箱を担いだ人夫たちが店の中に運び込んだ。店の看板には『リンドウ商会　リトルベルク支店』と書かれていた。

人夫たちが積み荷を店に運び込む中、馬車の中から武装した男たちが現れた。彼らは王都からリトルベルクの間の道で商人と積み荷を護るために雇われた傭兵たちだった。傭兵たちは、雇用主の商人から金の入った小袋を受け取ると商人街の人ごみの中へと消えていった。統一された鎧を身に纏った騎兵たちは辺りを警戒しながら隊商の周りを囲っていたが、その中で唯一装いが違う騎兵が商人の近くにより下馬した。下馬した者の髪は赤色で長く、顔は中性的で女物の衣装を着れば誰も男とは思わないような顔立ちをしており、皮の鎧を纏い槍を提げていた。

「リンドウさん」
「ああ、これはクリスフォード殿。如何なされましたか？」
「護衛依頼も終わったので報酬の受け取りと別れを言いに参りました」
「……例の話は考えてくれましたか」
「ご好意は有り難いのですが、今回はここリトルベルクに来ることが本来の目的なので」
「先に提示した額よりも倍の報酬をお約束すると言ってもですか……」
「すみません、お受けできません」
「……はあ、わかりました。では、こちらが今回の報酬です」

小柄な商人の男、エリアス・リンドウは懐から小袋を取り出し、

目の前の槍を提げた少年、ウィリアム・クリスフォードに手渡した。

「……提示されていた報酬額よりも多い気がするのですが」

「それは今回の旅の道中におけるあなたの活躍の分の上乗せです」

リンドウ商会の隊商が王都からリトルベルクに向かう間、三度の盗賊の襲撃を受けた。盗賊たちはこの乱れた時勢によって勢いがあったが、商会専属の護衛の騎兵とウィリアムの率いる傭兵団の奮闘によって切り抜けることができた。中でもウィリアムの槍の働きは大きく、その働きを間近で見たエリアスは彼を商会の専属護衛に引き入れようと説得し続けたが、結局今日まで叶うことはなかった。

「本当は我々リンドウ商会専属護衛をやっていただきたいのですが、せめて王都までの帰路の護衛は頼めないでしょうか」

「リンドウさん、先にも私の目的はリトルベルクに来ることと言いましたが、実際の理由は傭兵稼業をやめて残りの人生をリーネンブルク領の小さな村で過ごそうということです」

「な、何故に傭兵をやめるなどと！　あなた程の腕があればどれだけでも富と名誉が手に入るというのに！」

「……大事な人と約束を交わしておりまして」

「……そうですか。いや、そういうことでしたら私はもう何も言いません」

そういうと、エリアスは苦笑いを浮かべた。リンドウ家の次男として、商会を仕切っている父の、そして商会を継ぐ兄のために今までたくさんの商談を行い、相手を自分に引き入れる術を学んできた

エリアスはこの説得が失敗に終わったことに少々落胆した。

「それでは、私はこれで……」
「あ、ありがとうございました！」

リトルベルク商人街――――

ウィリアムはリンドウ商会を後にすると、商人街を北に進み、中央広場へ向かって歩き出していた。ウィリアムがこのリトルベルクに来るのは数年振りのことで町並みは変わらずにあったが、昔の頃とちがって活気づいているような気がした。王国全体が不安定な状態であることは、王国が商売相手でもあるウィリアムにとって簡単に察知することはでき、その影響が一番先に表れるのは最下層の階級の平民であることは経験から知っていた。だからこのように昔より活気づいている町を見て不思議に思った。

（たしか、領主が先代のイリーナに戻ったのだったか…　それにしてもすごいなこれは…）

町の活気に気負わされながらも、ウィリアムは店をまわって旅に必要なものを買いそろえた。彼が目指す村はこのリトルベルクから

南へいった所にあり、歩いて数日かかるために旅の支度が必要だった。

買い物を終えたウィリアムは手頃な宿を取り、荷物を部屋に置いてくると商人街に戻った。　日はまだ昇りかけている途中だが、長い旅の間は粗末なモノしか食べられなかったので、ウィリアムは昼食を摂りに傭兵ギルドに向かった。傭兵であれば食事代が半額になる上に、彼の大好物である『鳥モモ肉の炙り焼き』が食べられることもあり、彼の歩く速さも自然と速くなった。

ギルドの前に来て、初めてその前で異様な人だかりがあることに気づいたウィリアムは、遠巻きに見ていた男に尋ねた。

「あの、これはいったいどうしたのですか？」
「ん、ああ。何でも余所者の傭兵たちが娘の持つ剣を取り上げたとか……」

なるほど、確かに騒動の中心には傭兵らしい男たちと女の子がいる。

（……あの顔、確かリンドウ商会の護衛の中にいたな……）

ウィリアムは記憶の中にある、今朝までいっしょだった傭兵たちの顔を思い浮かべた。顔は赤かったが特徴的である長身の男を思い

出し、ため息を漏らした。酒が入っているとはいえ、このような軽卒な行動を取るような輩とともに旅をしてきたかと思うと落胆した。

「……まあ、その内片付くだろうとは思うがな」
「何故そう思うんですか？」
「さっきサイトウ様が人垣の中に入っていくのが見えたからな」
「……サイトウ様？」

そう答えると、男はウィリアムの方に振り返った。

「お前さん、あんまこの辺りで見ない顔だな」
「はい、今朝王都から来たばかりで……」
「そうか、それじゃあ知らないのも無理はねぇな。サイトウ様は今侯爵様の下で政を仕切っていらっしゃるお方だ……ほれ、あの茶色のローブを纏っているのがそうだ」

男はそう言って人垣の中心を示した。先ほどは人ごみで見えなかったが、確かに茶色のローブを着た者がいた。しかし、頭はローブを被っていて分かりづらいが、あの髪の色は……

「……黒、髪？」
「おお、サイトウ様の髪は黒色だな」
「なっ！」
「まぁな、最初は俺らも近づきづらかったがな、少しずつ話していく内にいい人だっていうのが分かってな。それにあのお方は政を仕

切っていらっしゃるが貴族じゃない。だから俺らも気安く声を掛けたりすることができる」

……つまり、あのローブの男、サイトウという者は平民の身分でありながらリーネンブルクの治政を行っているということである。ウィリアムはこの時勢に平民に権力の一部を任せるイリーナの器の大きさにも驚くが、それをうまく導いたサイトウという男にはさらに驚かされた。

そう考えていると、人だかりから怒鳴り声が聞こえ、直ぐに剣を交える音が聞こえた。

（まずい！）

サイトウという者はよく分からないが、立ち振る舞いから見ても戦いに慣れているとは思えない。ウィリアムは人だかりを掛け除けて中心に向かった。なぜそのような行動を取ったかはその時は分からなかったが、考えるよりも先に体が動いていた。

人だかりの中心では3人の傭兵たちが皆抜剣しており、長身の傭兵は見事な装飾の剣を持っていた。対する側には壮年の男が倒れており、その男をローブの男が守るように抱いていた。その近くには村娘の風貌をした少女が目に涙を溜めて立っていた。

その場を離れようと振り向いた傭兵たちは、ウィリアムの存在に驚いていたが、ウィリアム自身、彼らなど眼中になくただ茶色のローブを身に纏ったユウキの姿を捉えていた。

『ちから』第1話（前書き）

2ヶ月投稿することができず、すみませんでした。

『ちから』第1話

リトルベルク傭兵ギルド前ーーーー

「……」
「てめぇ、ウィリアムか」

傭兵たちの前に立ちはだかった赤髪の美少年は一言もしゃべらず、また彼らと視線を交わすこともなく、その両方の紅眼は……

（……さっきから俺、ガン見されてるな）

そう、少年が現れてからずっと俺は見られ続けている。見方によっては睨まれているとも捉えることができるが、もしそうだとしても、恨まれる理由が思いつかない。立場上、一部のヒトからは恨まれてはいるが、彼がそういった部類の人間だとは思えない。

「おい、ウィリアム！　てめぇ、いったい何しに来た！」
「……む、おぉそうだった。お前たち、経験豊かな傭兵ならば喧嘩を売る相手ぐらい見分けるようにしなくてはな」
「ぁあん？　どういう意味だ」
「そこのローブを纏った御仁はな、リーネンブルク侯爵の下で政を任されている者で、名を『ユウキ・サイトウ』という方だ」

「……」
「信じてないようだな。ならば右手を見せて貰えば証明となる物があるはずだ」

ウィリアムという少年に言われて、俺は袖を巻くって右手が見えるように前へつきだした。右手の人差し指には指輪がはめられており、牡羊の頭が刻まれていた。

「リーネンブルク侯爵家の紋章である、牡羊が刻まれた指輪をもつこの方は間違いなく侯爵家に関わりをもつ人間だ。……剣を納めよ」
「……ちっ」

傭兵たちは剣を納めると俺と少年の前から立ち去ろうとした。

「おっと、忘れておった。お前たち、その女子(おなご)に剣を返すのだ」
「ふんっ」

そう言うと、傭兵は少年に剣を投げつけて立ち去った。

「まったく……。　サイトウ殿、お怪我はないか？」
「あっ、大丈夫です。　……アレイン、立てるか？」
「むっ、何とか」

アレインに肩を貸しながら立ち上がった俺は、少年と向き合った。

「助けていただきありがとうございました。私はご存知かと思いますが、『ユウキ・サイトウ』と言います。こちらは友人の『アレイン・ゲイルバーグ』です」

「私は『ウィリアム・クリスフォード』という、しがない傭兵だ。よろしく頼む」

「それで、クリスフォード君は彼らのことを知っているんですか？」

「あぁ、ある商人の護衛でいっしょになってな。それだけだ」

「そうですか」

「もう用がないなら私は去っても良いだろうか。長旅で碌なものを食べていないから腹が減っているんだ」

「あ、はい。いいですよ」

「それと、この剣はあなたからあの女子（おなご）に返してあげてくれ」

「わかりました」

そういうと、クリスフォード君は傭兵ギルドの中へと姿を消していった。彼から渡された剣を俺は眺めた。鞘は全体が白く、金で装飾がされていて、剣の柄は金で出来ており唐草模様が彫られていて、中心には赤い宝玉が埋め込まれていた。仕事上、高価な物品をたくさん見てきたが、こんなに美しく輝く玉（ぎょく）は見たことがなかった。

（何の玉（ぎょく）だろう……）

ただ、そうただ純粋にそう考えただけだった。しかし、俺は次の

瞬間に起こった出来事に驚きを隠すことが出来なかった。

――――――火霊結晶『アルテノンの宝玉』

（えっ？！）

ふいに頭の中に浮かんだ言葉に俺は驚いた。剣の柄の宝玉に触れながら疑問に思っただけなのに、何故このようなことが起こったのか皆目見当がつかなかった。しかし、頭に浮かんだ言葉には心当たりがあった。

『アルテノン』……四代精霊統治時代に火霊神ルークムントの下で『火の民』を治め、影の侵攻の際には先陣を率いて戦った英雄の名前だ。

その名を冠するこの宝玉は、相当の価値か能力（ちから）を有するのだろう。しかし、何故そのような物をこんな娘が？

（まぁ、こんな娘にあまり深く追究するのもあれだしな……）

俺は振り向くと、少女に向けて剣を差し出した。

「はい、これだけきれいな剣だとまた誰かに取られてしまうかもしれないから、布か何かで包んで持ち運びなさい」

「……あ、ありがとう」

その剣を受け取ると、少女は走り去ってしまった。

「さて、俺たちもそろそろ……ん、どうした、アレイン？」

アレインの方を向くと、アレインはさっきの傭兵が入っていった傭兵ギルドの方を見つめていた。

「……アレイン？」

「いや、何でもない。それよりも何かあの剣を見て考え事をしていたみたいだが」

「ん、いや、まぁ……　あ、体は大丈夫か？　家まで送ろうか」

「問題ない」

「だが、念のために……」

「俺に構っている暇はないと思うぞ」

そういうと、アレインは通りの先を指さした。その方向から、一人の少女がこちらにむかって駆けているところだった。赤い髪に赤

い猫耳の侍女服を着た少女、ネルは俺の姿を見つけると手を振りながら走ってきた。

「ユウキ様！　お探ししました」
「ネル、どうしたんだそんなに慌てて？」
「はい、えっとですね、イリーナ様が天気が良いのでお昼を外で食べられるのですが、ユウキ様も一緒にどうかと訊いてきて欲しいと頼まれまして……」
「あぁ、わかった。是非ご一緒させていただくよ。アレインはどう？」
「俺は遠慮させていただく。先の闘いで少し体を痛めたからな、イリーナ様にはよろしく言っておいてくれ」

アレインは俺から離れると人ごみの中へと紛れていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3057s/

黒之戦記

2011年10月13日23時35分発行